

2021年3月14日 礼拝説教要旨

詩編講解説教52 「真の勇者」

詩編52：3～11、ヨハネ16：33

詩編第52編はサムエル記上第22章に出てくるある出来事が背景にあります。簡単にそのあらすじを申しますと、ダビデがサウルのもとから逃亡していた時に、ダビデがノブという町の祭司アヒメレクのところに逃れ、献げ物のパンを食べて飢えをしのいだという出来事がありました。その時にエドム人ドエグがたまたまそこに居合わせていて、このことをサウルに密告しました。サウルはダビデを助けたという理由で祭司アヒメレクらに死罪を言い渡します。サウルは異邦人であるエドム人ドエグに「お前が討て」と命じ、ドエグはすぐにアヒメレクをはじめ祭司総勢85名を殺してしまいます。それだけではなくアヒメレクの住んでいた町の住民、家畜まで殺してしまうという何とも凄惨な事件がこの詩の背景にあります。

「力ある者よ、なぜ悪事を誇るのか。神の慈しみの絶えることはないが、お前の考えることは破滅をもたらす」(3～4節) この「力ある者」というのは、おそらくこのドエグのことを指していると考えられますし、また権力にもものを言わせて自分の地位を脅かすものをすべて排除していくサウルにも当てはまると考えることもできます。この世のものに依り頼み、それで自分に何か力があると考え、あるいはそういうこの世の権力におもねり、すり寄っていくことで何か自分が力を得ているように感じる。実際に祭司を殺したドエグにしても、その命令を下したサウルにしても、もはや神さまを神さまとも思わない、自分が神になっている状態です。それをこの詩人は「力ある者」と皮肉を込めて呼んでいます。

こういうことは決して昔話なのではなく、実際に人類はこのような歴史を繰り返してきました。一度、戦争が起これば、このような惨劇は繰り返されます。ナチスのホロコーストやルワンダ、ボスニアでの虐殺、また現在のミャンマーで起こっていることもそうでしょう。わたしたちの国もかつて太平洋戦争の時にアジアの国々に対して侵略して武力で支配する時代がありました。もちろんわたしたちも簡単に「力ある者」になります。富や社会的地位を利用して力を振りかざして人を黙らせてしまう。小さな権威を振りかざして支配する。それは家庭の中でも、職場でも起こります。でもそれは本当に「力ある者」なのでしょうか。

「力ある者」と訳された言葉は男性形で特に戦闘能力を持つ壮年男子を指す言葉です。それゆえ聖書では「勇士」と訳されるところもあります。勇敢な戦士。今日は説教題を「真の勇者」としましたが、勇ましく強い人間を想像される方も多いかと思えます。特にそういう勇ましさや強さを男の子は求められるかもしれません。ヨシヤ記などには「強く、雄々しくあれ」(1：6)とありますから、そういう男性的な強さやたくましさも聖書も求めているのではないかと考えてしまう。だからついつい男の子には「もっと強くなりなさい」と言ってしまう。特にこれからの時代、強くたくましく生きてほしいと願うのはどの親も同じでしょう。この世の荒波を乗り越えていく、立ち向かっていく力を持ってほしい。けれどもここは気をつけなければならないことです。場合によってはそれがプレッシャーになって、自分には力がないと勝手に思い込み、自分を閉ざしてしまうということもあるのです。聖書はそういう男性的な勇ましさや強さを求めているのでしょうか。肝心なことはその強さ、勇気がどこに根ざしているのか。自分の中にある力なのか。そこで「力ある者」の意味は大きく変わってくると言わなければなりません。

聖書は人間の作り出す強さや勇ましさを求めているわけではありません。「わたしは生い茂るオリーブの木。神の家にとどまります。世々限りなく、神の慈しみに依り頼みます」(10節)ここに「慈しみ」(ヘセド)が出てきますが、これがこの第52編を貫いている主題でもあります。

「慈しみ」(ヘセド)はこれまでも何度も出てきていますが、これは決して変わらない神さまの約束のことです。アブラハムから続く不変の契約、それは人間の側の功績は関係ありません。神さまが、その愛と強い御意志を持って貫かれる恵みの契約です。それは旧約と新約を貫いてイエス・キリストによって更新され、わたしたちもその契約の中に招かれ置かれます。そういう永遠不変の契約、それが神さまの慈しみ(ヘセド)であり恵みなのです。聖書が示す力は、何よりそこに根ざしています。パウロも「わたしの子よ、あなたはキリスト・イエスにおける恵みによって強くなりなさい」(IIテモテ2:1)と言います。恵みによって強くなる。わたしたちに力がある、勇気があるとすれば、それは神さまの慈しみ、恵みによるものです。

それは人間的な強さとは全く違います。ドエグやサウルのような力を振りかざすものではありません。パウロは別の手紙で次のように述べています。「すると主は『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱い時にこそ強いからです。(IIコリント12:9~10)これは一見弱々しく、死にかかっているような状態でしょう。でもその弱い時にこそ強いと言える。これは負け惜しみではなく、そこに神さまの恵みが注がれることをパウロは実際に体験し、これを証しているのです。それが信仰の世界です。

世間では何かを所有することで、それを担保にして自分が強くなったと思ったり、自信を持ったりするでしょう。それは実際に富であったり、学歴や現在の地位のようなものかもしれません。いつまでもそのようなものにしがみついて、自分に力があると考えている人は多い。けれどもそういうものを手放さなくなる時が必ず来ます。人生の挫折において、あるいは年老いて、病気になって、これまで自分が必死につかんでいたもの、依り頼んできたものを手放さなくなる時が来る。その時が本当の自分なのでしょう。その時にどうするか。何も無くなった時に、わたしたちに最後何が残るのか。結局、最後は信仰しかないのではないのでしょうか。だからこそ、キリストは何もかも捨てて、十字架でご自身の命をわたしたちに注ぎ尽くしてくださいました。何も残らないわたしたちを神さまの慈しみ、恵みで満たしてくださるためです。そのことを知っていることが、わたしたちの真の強さや勇気になります。